

---

# 彼女の好きなモノ

赤いからす

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

彼女の好きなモノ

### 【Nコード】

N6845C

### 【作者名】

赤いからす

### 【あらすじ】

殺人を犯した女を中年の刑事が取調べしていた。女の過去を探るうち、彼女の狂気に満ちた行動が徐々に明らかになっていく。そして、最後に、刑事は身も凍るような体験をすることになる。

彼女の好きなモノ

(前書き)

背筋が凍る結末に期待して下さい！

殺風景な四畳半の部屋に耳がこぼれ落ちそうな紫色のイヤリングをぶら下げ、真つ赤なワンピースを着た女と中年の刑事がスチール製の安っぽい机を挟んで座っていた。鉄格子がはめられた窓から見える桜の木が自然光の行く手を阻み、薄暗い取調室の中で白熱電球を備えた卓上スタンドが出番を窺っている。

「どうして恋人を殺したんだ？」

刑事は紺色のスーツの襟を直しながら女に尋ねると隅の小さな机に陣取っていた制服警官が供述調書のためにノートパソコンのキーをカタカタと叩き始めた。

「好きだったからよ」

女は反省する態度を見せず、膝を大袈裟に持ち上げ、足を組んで太腿を見せた。ストレートの長い髪が似合う美人タイプで挑発しているのかスタイルを自慢したいだけなのかよくわからない。

「ゴホン」

咳払いをして一度視線を外した刑事は改めて質問をした。

「好きなら殺す必要はないだろ？」

「私はね、何事にも飽きっぽい性格なのよ。好きなものができるとツバをつけてすぐに手に入れる。新たに好きなものができてしまうと、古くなったものをそのまま捨てるのが惜しくなって自分の手で永遠に魂を奪わないと気がすまないの」

「好きなものを一人占めにしておきたい……というわけか？」

刑事は女と視線を合わせた。

「まあ、そういうことね」

女はニツコリと微笑んで長い髪をかきあげた。クリスマスツリーの飾りとしてつけられるカラーボールそっくりのイヤリングが耳元

で揺れた。

「一番初めに好きになったものは？」

刑事は尋問を続けた。

「子供の頃は本だったかな。男の子を理由もなく殴ったら乱暴な子というレッテルを貼られて友達もいなかったから家の近所の図書館でブラブラするしか居場所がなかったのよ。塩素の嫌な臭いがしないきれいで冷たい水が無料で飲めたし。必然的に本を読むようになったわ。お気に入りには『赤毛のアン』でカナダの風景やアンの思想に浸透したのよ」

「それで？」

「片っ端から本を読んだの。小難しい蔵書から辞典から世界地図にも一通り目をおしたわ。だって世界旅行した気分になれるでしょ。でも、そのうち飽きちゃうと独占したくなって燃やしちゃった」

「燃やした？」

「そう、図書館ごと。放火することを心に決めてから毎日一階の色々な場所の窓の鍵を外しておいたの。もちろん忍び込むためにね。警備員さんのミスでトイレの小窓の鍵の閉め忘れがあったのは四ヵ月後。暑くて寝苦しい日だった。家にあつたサラダ油を本に染みこませてライターで燃やしたわ。なかなか燃えなくてちょっと時間がかかったけど半焼するまで誰にも気づかれなかった。消火活動がはじまった頃はほんとに焼け石に水だったわ」

刑事はため息を押し殺して質問した。

「この写真の有水哲也と知り合ったのはいつだ？」

机の上に置かれた写真には端然とした顔つきの若者が写っていた。髪も染めていなければ白いＴシャツにジーパンというラフな格好で清潔感のある好青年といった印象の21歳の大学生。

「半年前に合コンで知り合ったの。最初に声をかけてきたのは向こうなのよ。すぐに付き合うようになって半年たったら別れも言わず

に私の前から消えようとしたの。勝手すぎると思わない?」

「それが有水さんを殺した理由か?」

刑事は両方の眉を寄せた。

「そうね。だつてすごい失礼なのよ。私の家に招待してコレクションを見せたら家から飛び出して逃げたの」

刑事は女を捕まえたときのことを思い出した。

『男が包丁を持った女に追いかけてられている』という通報があつて向かうと、血を流しながら住宅街を疾走する男を発見した。

男が狭い路地裏に逃げるとすぐさま女が後を追つて入つていった。路地裏の両脇は雑居ビルがひしめき合い、ブロック塀が各ビルの敷地を囲つていた。突き当たりのブロック塀を男がよじ登ろうとした背中へ女は背骨が軋む勢いで包丁を突き刺し、警官が取り押さえたときには男はなにかにとり憑かれたように痙攣しながら倒れていた。そして、彼女の家の物置には業務用の冷凍庫があり、カチカチに凍つた元彼がコレクションとして保存されていた。マスコミは猟奇的な女の犯行より、警官の目の前で殺害を食い止めることができなかった警察の失態を大きく報道した。

「私、好きな人を追いかけている情熱的な自分が好きなの」

女は両肘を机の上へのせ、手のひらで顎を支えて刑事の顔を覗きこむ。

刑事は白い歯をこぼして苦笑い。

「君は起訴されるまで留置所で過ごすことになる。そのイヤリングを外してもらおうか?」

「どうして?」

女の表情に不快感はなく、目をクリクリさせて楽しそうに訊いてきた。

「自殺するために飲み込んでしまふかもしれない」

「わかったわ」

女は意外にも素直にイヤリングを外した。

「刑事さん。いま、私が一番好きなモノがわかる？」

女は微笑みながら尋ねた。

「いいや、君の心はわからないよ」

刑事が手を伸ばしてイヤリングを受け取ろうとすると、女は自分の手にペロツと唾をつけてから刑事の手を握った。

「私、あなたのことが好きになっちゃったかも」

了

(後書き)

ホラー(連載)ですでに完結している「狂犬病予防業務日誌」と「無期限の標的」やホラー(短編)では「水たまり」「娘、お盆に帰る」「人類、最後の言葉」「面相筆」「彼女の好きなモノ」など多数投稿しています。恋愛(短編)でも「木漏れ日から見詰めて」という作品を投稿してますのでよろしければそちらのほうも感想と評価をしていただければうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって  
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6845c/>

---

彼女の好きなモノ

2008年8月29日19時05分発行